

子どもの自立を育む音楽科の支援

ー音楽科と他教科との関わりを生かした授業づくりー

福田 秀 範

1. 音楽科と他教科との関わりを生かす

私はこれまでに、いくつかの他教科の題材を音楽の教材として関わりを生かした授業づくりに取り組んできた。平成8年度に取り組んだ谷川俊太郎作「どきん」を題材にした音楽づくり¹⁾、平成9年度の中川李枝子作「くじらぐも」の音楽づくり²⁾、平成10年度のまどみちお作「くまさん」の音楽づくり³⁾などは、国語科教材との関連を図って行った授業である。最近の試みとしては、本校で進めている「総合的な学習」のうちの環境領域との関連を図った音楽づくりがある。(平成9年「猿猴川の様子を音でみんなに伝えよう」⁴⁾、平成10年「音で伝えよう。これが元字品だ」)

音楽教育界の動向を見ても、平成8年には山本文茂・著「国語教材によるモノドラマ合唱」、平成9年には同・編「モノドラマ合唱の実践」が相次いで出版され、音楽科と他教科との関わりを生かした授業づくりについては次々と現場からの実践報告がなされるようになった。そして平成10年12月に告示された新学習指導要領にも、「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の中で「低学年においては、生活科などとの関連を図り、指導の効果を高めるようにすること」という新しい事項も加わった。学校5日制の完全実施や総合的な学習の時間の新設に伴い、音楽科の学習指導にも内容のスリム化や今日的教育課題に応える新しい発想が今後さらに強く求められることであろう。ここでは、音楽科と総合的な学習との関連を生かした音楽づくりの実践をもとに、他教科と関連を図る意義や今後の課題について探っていききたい。

2. 研究の計画

(1) 研究仮説

音楽科と他教科との関連を生かした授業づくりを行えば、他教科で体験した感動が表現意欲になり、子どもたちはより豊かな音楽表現の喜びを味わうことができるであろう。

(2) 研究仮説を検証していくための具体的アプローチ（授業づくりの手順）

- ① 音楽科との関連が生かせる題材の選定
- ② 音楽表現として題材を生かすための表現方法の決定
- ③ 子どもたちが題材から得た「感動」の明確化
- ④ 「感動」が「表現意欲」に向かうための教師の支援
- ⑤ 子どもの視点に立った振り返り

3. 実践の概要 「音で伝えよう～これが元字品だ～」(第2学年)

＜音楽科と総合的な学習「環境」領域との関連を図った題材＞

(1) 題材について

元字品は、数少ない自然の宝庫であり、山・海・磯・砂浜など興味・関心を喚起する対象が様々なにそろっている。本題材は、総合的な学習「環境」で実際に元字品を訪れ、体験して感じた自然への親しみや愛情や感動をもとに、実際に聞こえてきた音やイメージした音を声や楽器を使って音楽として構成していくことをねらいにしている。この学習を通して、身近な自然に存在する価値ある音に気づくとともに、自分の音楽観を広げていけるようにしていきたい。(アプローチ①)

本学級の児童は、昨年度「猿猴川の様子を音で表そう」という題材を通して、自然の音を声や楽器を使って表し、音楽として構成する活動を行っている。個人やグループで川に住む生き物の音や泥を歩くときの音など様々な音を発見し、それらの音を工夫して声や楽器で模倣する活動ができた。その際グループごとの音を一つの「猿猴川の音楽」として構成するには教師のアイデアが多く必要であった。今回は子どもたちの力で全体の構成も考えて作品づくりができるように支援の在り方を工夫していきたい。(アプローチ②)

(2) 指導目標

- ① 身近に存在する様々な音に気づき、声や楽器で音楽として表現することができる。
- ② 身近な音の様々な表情を感じ取り、価値あるものととらえ、音楽観を広げることができる。

(3) 指導内容と計画…………… 8 時間

- 第一次 どんな音が聞こえるかな…………… 1 時間 (+元字品探検隊 6 時間)
- 第二次 お気に入りの音を紹介しよう…………… 1 時間
- 第三次 元字品の様子を音で表そう…………… 4 時間
- 第四次 音で伝えよう～これが元字品だ～…………… 2 時間

(4) 学習活動の実際

総合的な学習「元字品探検隊」(環境領域)における子どもたちの感動体験は、次のような言葉で明確化された。(アプローチ③)

<森の様子について>

- ものすごく大きな木が立っていた。太くて、枝が森いっぱいのにびていた。
(子どもたちはこの木を「トトロの木」と名づけた。)
- 木の回りには落ち葉がいっぱいで、歩くとフワフワして気持ちがよかった。
- 落ち葉の種類もいっぱいだ。においのする葉っぱ、触るとかぶれる葉っぱ……。
- 木の近くには真っ白いきれいな灯台があった。でも今は使われていなくて残念だ。
- 私は、灯台のそばでキノコを発見した。うれしかった。
- 階段を下りたら、とてもきれいな海が広がっていた。

<砂浜の様子について>

- 近づいて見ると、ゴミがたくさん落ちていて悲しかった。
- 砂浜には貝殻がたくさんあった。歩くとサラサラ、シャリシャリいろんな音がした。
- 海草がたくさん砂浜に上がっていた。歩くとフワフワして気持ちがよかった。

<海の様子について>

- 船がたくさん通っていた。通るたびに波が大きくなり、とても迫力があつた。
- 船が通った後は、とても静かな波になった。波の変化がとてもおもしろかった。
- ぼくは思わず海に飛び込んだ。とても気持ちよかった。水がとてもしょっぱかった。
- ワカメ(本当はアオサ)がたくさんあったので、ワカメ合戦(投げ合い)をして遊んだ。

<磯の様子を見て>

- ヤドカリやカニがたくさんいた。隠れたり、出てきたりしてにぎやかだった。
- 岩に波がぶつかると、シュワシュワと泡が出来たり、消えたりしてきれいだった。

この感動体験を音楽表現につなげる手だてとして、以下のような指導内容と計画に沿って、学習活動を行った。(アプローチ④)

[第一次 どんな音が聞こえるかな][第二次 お気に入りの音を紹介しよう]

ここでは、自分の感動体験をもとにして、自分なりの音探し・音づくりが進められた。実際に聞こえた音をどうすれば、教室にもどってみんなに聞いてもらえるか、そんな思いを抱きながらの活動であった。実物を持ち帰って、それを音素材に生かす子どももあった。貝殻は人気の素材で、ビニル袋に入れて振ることで、歩いたときのサラサラ鳴った感動を伝えようとした子ども、2枚の貝殻をこすって、砂浜で遊んだときの思い出を表現しようとする子どもなどがそうである。落ち葉も同様にたくさん持ち帰り、歩いてフワフワカサカサした様子を表現するのに生かしていた。ワカメは帰りの交通事情や荷物の都合上、重くてかさばり誰も持ち帰れなかった。それでも投げ合いをした感動をみんなに伝えたくて、いっしょにした友だち協力して考える姿も見られた。ワカメの代役にはハンカチが選ばれ、それにたっぷりと水を含ませ、厚い窓ガラスに投げつけるというのが、みんなが考え出した表現方法であった。

このような一人一人、あるいはグループの音の聴き合いを行い、全体で振り返る場を持った。ここで子どもたちは一人一人の感動体験の共通項が多数あることに気がついた。また、音ではどうしても伝えられない感動体験、自分だけでは表現しきれなくて、だれかに手伝ってほしい感動体験があることにも気がついた。

そこで次の課題を設定した。

「同じ感動をした人で協力してもっと大きな表現にしよう。」

教師の思いと子どもたちの活動に向かう意欲はこの時点で一致している。共通の感動体験を持つもの同士がグループになる。これは自分の表現したい「元字品」が何なのかを自分で決める大切な場であった。

こうして、第三次の活動に向かった。

[第三次 元字品の様子を音で表そう]

前次で出来たグループは全部で6つである。それぞれのグループごとに、どんな様子を表していくかを話し合いをした。その中で浮かび上がった課題とその解決に向けて考えた自分たちなりの表現の見通しを右に示す。

この見通しを立てた後、実際の表現活動に取り組んでいった。各グループごとの活動の様子を次頁に示す。番号は活動の広がっていった順を表している。完成するまでには、どのグループも新たな課題に直面し、その度に自分たちで解決していく様子が見られた。

グループ名と出てきた課題	課題の解決に向けての表現の見通し
森グループ <課題> トトロの木のことや灯台の様子を表現したい。	⇒ <ul style="list-style-type: none"> ○トトロの木や灯台をテーマに詩をつくりそれに旋律をつけて歌う。 ○森の様子を表す音づくりをする。 ○様子の音には、できる限り実物を使う。
砂浜グループ <課題> 貝殻やゴミがたくさんあった様子や貝殻でいろいろ遊んだ様子を表現したい。	⇒ <ul style="list-style-type: none"> ○砂浜の様子を詩をつくり、朗読する。 ○詩の朗読に合わせて、砂浜の様子に合う音づくりをする。 ○セリフも入れ、様子が分かりやすくする
海グループ <課題> 船が通るたびに変わる波とその迫力を表現したい。	⇒ <ul style="list-style-type: none"> ○表現したい海の様子を言葉で表して、みんなの気持ちを合わせる。 ○船の音と波の音を探して、迫力のある様子が伝わる音づくりをする。
海の探検隊グループ <課題> 海にもぐった気持ちよさやワカメ合戦をして楽しかった様子を表現したい。	⇒ <ul style="list-style-type: none"> ○海にもぐった気持ちを詩に表し、旋律をつけて歌う。 ○ワカメ合戦の様子を、本物の水をうまく利用して音づくりする。
磯の生き物グループ <課題> たくさんの生き物がウジョウジョ岩のすき間などにいた様子を表現したい。	⇒ <ul style="list-style-type: none"> ○磯の様子を言葉にし、担当の音を決める ○表現したい生き物の音はとても小さいので、マイクをうまく利用して音づくりをする。
磯の探検隊グループ <課題> 生き物をつかまえたことや磯から聞こえた岩におつかる波の音を表現したい。	⇒ <ul style="list-style-type: none"> ○自分が磯に行ってやったことを思い出し言葉に整理してみる。 ○自分の聞いた音を、それぞれで音づくりする。

森グループ

- ①詩をつくる。
- ②歌担当と音担当に分かれて練習を始める。
- ③歌は即興で歌いながら教師が採譜を行う。
- ④音は各自が探し、練習する。
- ⑤歌と音を合わせて練習する。
- ⑥歌の旋律がはっきりしないので、旋律をキーボードで弾く担当が新しく決まる。
- ⑦森の音楽が完成する。

石浜グループ

- ①詩をつくる。
- ②朗読の担当を一人決め、音づくりはみんなで行うことを確認する。
- ③各自が音を探し、練習する。
- ④朗読と音を合わせて練習する。
- ⑤砂の音がバラバラに鳴っているだけに聞こえるので、歩いたり走ったりする様子が伝わるように、みんなでの練習に時間をかける。
- ⑥石浜の音楽が完成する。

海グループ

- ①波のイメージを言葉で確認する。
- ②船担当と波担当に分かれて練習を始める。
- ③音は各自が探し、練習する。
- ④船と波の音を合わせて練習する。
- ⑤波を大きくしたり小さくするタイミングが難しいので、一人が指揮をすることになる。
- ⑥自分たちだけでは迫力に欠けるので、大波では、他のグループに協力してもらう。
- ⑦海の自然の音楽が完成する。

海の探検隊グループ

- ①詩をつくる。
- ②歌担当と音担当に分かれて練習を始める。
- ③歌は即興で歌いながら教師が採譜を行う。
- ④音は各自が探し、練習する。
- ⑤歌と音を合わせて練習する。
- ⑥ワカメ合戦の音が思うように行かず、様々な試みを行う。
- ⑦セリフも入れ、ワカメ合戦の音もようやく見つけたし、海の探検隊の音楽が完成する。

磯の生き物グループ

- ①磯のイメージを詩に表す。
- ②詩はみんなのイメージに留め、各自が担当の生き物や自然の音づくりを行う。
- ③みんなの音を合わせて練習する。
- ④みんなの音が一斉に鳴ったのでは、何の表現かわかりにくいので、演奏の順を決める。
- ⑤表す様子にストーリーを加え、練習する。
- ⑥磯の生き物の音楽が完成する。

磯の探検隊グループ

- ①自分の表したい音を明確に言葉で示す。
- ②音は各自が探し、練習する。
- ③各自の音を合わせて練習する。
- ④人数が少なく、かすかな音ばかりなので、本番の演奏は、マイクに近づけて行うことをグループで打ち合わせる。
- ⑤磯の探検隊の音楽が完成する。

完成したそれぞれの音楽を全員で聴き合ったり録音をし、自分たちの表現の振り返りを行った。生で聴いた音よりも、マイクを使った方が音がよく聞こえて、表したイメージにより近づき満足している子どももあれば、生の音ではいい感じに聞こえたのにマイクだと違った感じになってしまったという子どもも表れた。全体的にはマイクによる録音は、耳でかすかにしか聞こえなかった音をずいぶんと拾っていて、「こんな小さい音だけど大丈夫かな。」と不安に思っていた子どもにとっては大きな自信になった。この後、各グループで各自の音の大きさに応じてマイクの回りに立つ位置を打ち合わせる工夫も始まった。この聴き合いをする中で、グループの演奏順も自然に決まった。自分たちが探検隊として実際に辿った順がそのまま演奏順になっていったのである。その際、磯の探検隊グループは3人という少人数だったため、磯の生き物グループと合体することになった。

こうして、各グループの音楽が一つの大きな作品になるための準備は完了した。

[第四次 音で伝えよう～これが元字品だ～]

みんなで作る作品が視覚的に分かりやすくするために、演奏順や途中に挿入される各グループが工夫したセリフなどを黒板に書いて確認しあった。音楽のはじまりには、総合的な学習「元字品探検隊」への意欲づけに教師制作の曲「元字品探検隊のテーマ」を、終わりには総合的な学習の時間で学習して得たみんなの思いを一つの詩に表し、教師制作の曲「みんなで伝えたい元字品」を使用している。作品がグループ音楽の寄せ集めではなく、みんなが一つの作品づくりに取り組んでいるのだという気持ちを明確にしていく一つの手だてとして行った教師の支援である。次に示すのは黒板で確認した作品の詳細をプリントにまとめたものである。その次に示す実際の音のイメージを表す図とともに参照していただきたい。

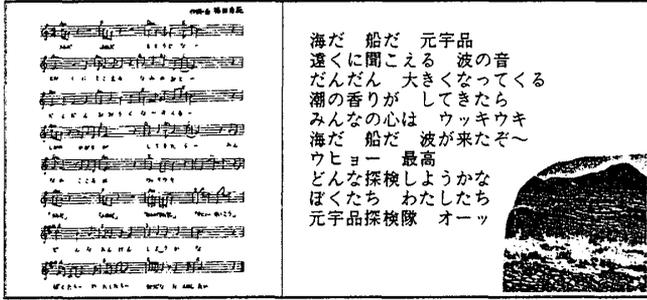


音でつたえよう 「これが元宇品だ」

2年1組の子どもたち&福田秀範 作

『元宇品探検隊のテーマ』

全員による音楽(歌)



海だ 船だ 元宇品
遠くに聞こえる 波の音
だんだん 大きくなっていく
潮の香りが してきたら
みんなの心は ウッキウキ
海だ 船だ 波が来たぞー
ウヒョー 最高
どんな探検しようかな
ぼくたち わたしたち
元宇品探検隊 オーツ

森グループによる音楽(歌と音)

トトロの木の前 落ち葉がいっぱい
においする落ち葉 かぶれる落ち葉
近くにある 大きな灯台
きれいだけれど つかわれていない
その近くに きのこと 生えていた
虫をいっぱい つかまえた
かいだんおると きれいな海だ



海グループによる音楽(音)

迫力ある波の音
たびたび通過する船
そのたびに 激しくなつては また静まる 波の様子



「行ってみよう。」

砂浜グループによる音楽(詩と音)

サラサラなるよ きれいな砂浜
静かな砂浜 楽しいよ
でも ごみがいっぱい
つりのごみもいっぱい
ごみを見つけたら どうしよう
そういうときは すてようね



「ついた。」

「とびこめ。」 ドッポーン

海の探検隊グループによる音楽(歌と音)

海の中 気持ちいいな
みんなで遊べて 楽しいな
ワカメ合せん 楽しいよな
水もしょっぱい 楽しいな
うれしいな



「ああ、おもしろかった。」

磯グループによる音楽(音)

<磯の自然>
岩にぶつかる水の音
ぶつかってできたあわが消える音
貝殻を拾って こすってみた音

<磯の生き物たち>
ヤドカリ、カニがかくれたり、出てきたりする音
たくさんの生き物がにぎやかに暮らしている音



『みんなで つたえたい 元宇品』

全員による音楽(歌)

1 みんなが 大人になったとき
元宇品ってどんなだろう
生き物たくさん いるのかな
貝殻たくさん とれるかな
みんなが大好き 元宇品
楽しさ いっぱい 伝えたいな

2 みんなが 大人になったとき
あのトトロの木は どんなだろう
森いっぱい 広がって
もっと 大きく なってるかな
みんなが大好き 元宇品
すばらしい自然 伝えたいな
みんなが大好き 元宇品
きれいな 元宇品
伝えてゆこう



鳥(リコーダー)
マックス

足音(ビニール袋に乗)
階段をのり
上る

枝を揺らす音(根を揺らす)
波の音
シヤ(歌のセリフと一緒)
歌「トトロの木の前... きれいな海だ」

波(パトロールの中に水を入れる)
(強く) (強く)

船
(パトロールに鳥を吹きこむ)

波
(声) サバーザバー... サバーザバー...

行ってみよう。
砂浜(ビニール袋に) 歩く音(砂を蹴る) たんぽぽ 走っている音

貝がら(ビニール袋の貝がらをふる) ぶんぶん音
(貝がらをもむ)

波(パトロールの中に水)

とびこめ
音 水の音
わかめの投げ入れの音
あわをふる音

「ああ、おもしろかった。」

「海の中 気持ちいいな...」

岩にぶつかる
波の音(おわんの水を手でなでる)

あわの音(軽く空を飛ばす)

貝がら(貝がらで) ぶんぶん音(貝がらをもむ)

ヤドカリの音
(貝がらでこする)

カニの音(小石をこすってこむ)

波の音(パトロールに水)

録音を終え、いよいよ自分たちの作品を振り返る活動である。(アプローチ⑤)

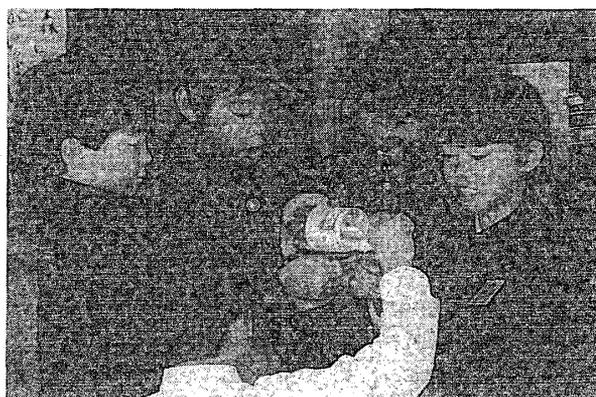
途中の練習風景は研究会での公開授業でたくさんの方々に聴いていただいたが、これが完成という作品を鑑賞するのは初めてである。どんな録音になったか緊張感が高まった。私はこの緊張感こそが、これまでの自分たちの取り組みの様子を振り返る大切な要素であることを日頃から子どもたちに話している。再生が始まってから、自分の音の出来具合に満足し歓声をあげる子ども、無事に録れていた安心感からほっと胸をなで下ろす子ども、友だちの成功をいっしょに喜び合う姿も見られた。中には、前回音が大きすぎたため、マイクから離れて演奏したが、離れすぎで聞こえなくなり、悔しがる姿も見られた。しかし最後の歌の場面ではみんなが一生懸命に歌った姿がくっきりと録音に残されていた。このような作品づくりをしていく際に気をつけなければならないのは、教師の自己満足に終わってしまうことである。今回の作品は子どもたちとともに、「元字品」の様子を音楽で表せた満足感を共有することができたといえる。いろいろな方面への発表の機会が得られたならば、よりこの満足感や完成度も増したのであろうが、今回はそういった機会には恵まれなかったので、少々残念であった。

4. 考察（成果と今後の課題）

今回関連させた「元字品」での自然体験学習は、子どもたちにはっきりとした感動体験を与えていた。音楽活動では、この感動体験が音探し・音づくりのイメージから作品全体の仕上がりに至るまで、取り組みの支えになっていた。子どもたちが他教科でいろいろな感動体験を得るであろうが、この感動体験が明確にできる題材こそが、音楽科との関連を生かせる題材といえる。国語科との関連が多く実践されているのも、国語科での学習が子どもたちに感動体験を与える機会が多いからと言えよう。今後さらに、子どもたちが感動体験を得られるような題材については、積極的に音楽科として関連が生かせるように指導計画を立てていくことが望まれる。

本実践のような自分たちで音楽づくりをしていくには、身の回りの音にじっと耳をすませる聴き取りの力、自分の表したい音を探し出すことのできる豊かな音楽経験、音素材や楽器などを最大限に生かしていけるための奏法に関する知識や技能、もちろん自分の思いを自信を持って伝えられる表現力といった様々な力が要求される。これらの能力を音楽科として身につけてほしい基礎・基本の能力ととらえ、系統的かつ計画的に日々の学習内容を工夫していくが重要であるといえる。

音楽科を他教科との関連の中で見ていくことで、音楽科としての存立基盤を確認していき、音楽科としての独自性を打ち出していこう⁵⁾というのが小島律子氏（大阪教育大学）の提案である。このことを受け、今後さらに研究を深めていきたいと考えている。



引用・参考文献

- 1) 広島大学附属東雲小学校、『平成8年度研究紀要』
- 2) 広島大学附属東雲小学校、『平成9年度研究紀要』
- 3) 広島大学附属東雲小学校、『平成10年度研究紀要』
- 4) 小島律子編著、『子どもを育てる音楽づくり実践事例集』、東京書籍、1998、p. 34-37
- 5) 日本学校音楽教育研究会、『学校音楽教育研究』第2巻、1998、p. 15